



## 授業づくりと学級づくり 子どもや学級の実態に合わせた対応を

よりよい授業を目指した取り組みが各学校で行われていますが、ここ数年、「学びのルール（スタイル）」を学校で統一する」といった取り組みが見られるようになり、一方でそういった方向に疑問を感じている教職員の声も聞かれます。

尾北教労では、このことに関して、ともに考え合うため、アンケートで声を集めてきました。そして、校長会との懇談会においても議論するため、「現状と提言」をまとめました。その内容をご紹介します。

### 学びのルールや規律

ここ数年、「温かい人間関係を基盤とした全員参加の授業」や「学び合いの授業」といったことが多くの学校で重視されています。それは、「自分の思いや考えを自分のことばで自由に伝え合うことのできる授業や学級をつくりたい」という先生たちの思いと重なります。

また、そういう授業や学級づくりに向けて「学びのルールや規律に基づいた指導」を取り入れる実践も見られます。

なごには、中学入学後、新しい環境になじめず、学習などでつまずく「中一ギャップ」を解消するための小中連携の手段として、授業の進め方や指導方法を「学びのルール」として小中で統一しようとして試みているところもあります。「学年が変わっても児童が安心して学習できる」「教師にとっても指導を定着させやすい」といふことも理由として聞かれます。

■ある程度、形式がそろってほしいという声も聞かれます。

●「新年度からの指導がやりやすい」

といった声が寄せられている中、「学びのルール」を統一することで「効率よく」指導できるという側面が指摘されています。

一方で、それを「押しつけ」と感じている先生方の声も以下のように寄せられています。

●「(指導方法の形式を)統一しすぎると先生方の個性がなくなり、息苦しくなってしまうと思います。」

●「(指導方法の統一を指示されることにより)おのおのが実態に応じて考えることを制限されると感じる。教育課程に基づいていければ、そこに至るアプローチの仕方は自由であるべきだ。」

●「授業規律は大切だが、それは子どもが発達段階やクラスの実態、目の前の子どもに合わせて、子どもたちと担当がくっついていくものである。」

●「形態や方法をそろえるのではなく、『本質』の部分をもっと磨いていきたい」といった声も寄せられました。職場においても全職員での話し合いを大切に、押しつけでなく、共通理解と職場の合意を大切に進めたいものです。

### 大切にしたいこと

尾北教労では、こういった現状から、今後重視したいこととして、以下の5項目を考え、校長会との懇談会に向けての提言を作成しました。

① 授業の進め方や指導方法を「学びのルール」のよう形式化して取り組む場合は、「なぜ、

それが必要か」の議論を職場で行い、納得と共通理解を大切にしながら進める。そして、子どもたちが自分自身で考え、率直な思いを出し合えるようにすることが大切であり、ルールや規律は必要最低限のものとする。

② 「学びのルール」や「授業規律」は、あくまでも目的達成のための指導の『手段』である。

それゆえ、目的に迫る手段や手立ては、子どもや学級の実態に合わせていろいろあってよいし、子どもや集団の成長に合わせてルールも次第に簡素化され、より自主的に活動できるようにする。

③ 学年や職場で討議する際には、『目的』の一致を大切に、「手段」は極力、各学級や担任に任せることを基本に、指導に関する細かい点での合意を無理強いしないようにする。

④ 発達や学力に遅れのある子への配慮を十分にすること、すべての子にとって参加しやすい授業づくりや学級づくりを進めること、子どもと教師、子どもどうしの信頼関係をつくる取り組みを大切にすること、「どんな意見でも聞いてもらえる」「安心できる学級づくりを進める。」

⑤ 子どもも、教師も、失敗から学ぶことを大切にする。教育現場においては、結果よりも過程が大切な場合も多い。「効率化」や「間違いのない結果」を優先させるのではなく、教師や子どもの主体性を重視し、自ら考え、実践し、失敗を通して学び育ち合うというスタンスを大切にすること。

⑥ 落ち着いた雰囲気、1人ひとりを大切に授業や学級づくりのために、教師の指導力量を高めることは大切だが、同時に、少人数学級などの条件整備を進め、ルールや規律に必要以上に頼らなくても、教師が個々の子どもをより把握しやすい、子どもたちが安心して生活できるような環境を整える。

★校長会との懇談会に向けての「尾北教労からの提言と要望」の全文は、尾北教労のホームページからご覧いただけます。(尾北教労で検索)

# 「全国学力テスト」に振り回されないために

## ～県内の小中校長への要請を行う(愛教労)～

「全国学力テスト」の結果公表による競争が年々激化し、過去問題の練習など、点数を上げるためのテスト対策が広がり、学びがゆがめられています。一方、愛知県では、県教委が「学力・学習状況充実プラン」「授業アドバイスシート」を各学校に下ろし、「授業改善」を勧めています。このことについて、県教委は愛教労の質問に対し、「事前対策を奨励するものではない」と回答しています。

愛教労は、この問題に関して、県内の全小中校長へ要請書を送ることになりました。以下がその内容です。「全国学力テスト」に振り回されないようにしたいものです。

### 全国学力・学習状況調査に関する要請書

日頃は、子どもたちの豊かな教育にご尽力いただきありがとうございます。

去る12月8日、文部科学省は、来年度の全国学力・学習状況調査(「全国学力テスト」)の実施要領を発表しました。来年度も、国語・算数(数学)の悉皆調査を実施するとしています。

全国学力テストでは、子どもたちは授業で習ったことのない内容の難しい問題をやらされるだけでなく、ほぼ1日中テスト漬けとされます。大変な負担となっています。とりわけ障害のある子にとっては、テストを受け続けられなくて途中で教室を出るなど、苦痛そのものとなっています。

また、質問紙調査では、プライバシーや内心に関わることに加えて、テストについての次のような質問があります。

「あなたは、今回の国語の問題について、どのように解答しましたか。」

「調査問題の解答時間は十分でしたか。」

難しいテスト、そして時間内でできないテストを受けさせられて落ち込んでいる子に、このような質問をすることで、さらに追い打ちをかけるものとなっているのです。

全国学力テストの結果公表によって、全国ではさらなる問題が起きています。文部科学省が都道府県別の平均正答率を公表し、地方自治体段階での市町村別・学校別の結果公表が広がるに従って、全国学力テストの点数を上げるための競争が激化しています。過去問題や練習問題のために授業時間が使われ、テスト当日まで新学年の教科書が使われなかったというように、本来豊かな学びを保障するはずの学校教育がゆがめられてしまう事態も起きています。

愛知県においては、昨年度、小学校国語の成績が良くなかったことを受けて、県教委が「学力・学習状況充実プラン」「授業アドバイスシート」を各学校に下ろすとともに、その活用状況についての調査を行いました。今年度も、昨年度と同じように、「充実プラン」と「アドバイスシート」を全校に下ろすなどして、「授業改善」を勧めています。

ただし、県教委は、「結果のみを意識した事前対策は好ましくない」「充実プラン・アドバイスシートは、あくまでも例示であって、事前対策を奨励するものではない」(2015・10・18 愛教労と県教委との交渉)と回答しています。事前対策をすることで、各学校の教育をゆがめてしまうことのないよう、冷静な対応が求められています。

そこで、関係機関への働きかけを含めてご尽力いただきたく、以下のことを要請するものです。

### 記

- 1 全国学力テストに参加しないよう市町村教育委員会に要請すること
- 2 市町村および学校別の成績を公表しないよう市町村教育委員会に要請すること
- 3 事前のテスト対策をしないこと